

○プロジェクト研究1656-1

研究課題

「地域での高度実践力拡大を目指した大学院看護学専攻(修士)の
カリキュラム開発」

○研究代表者	看護学科教授	加納尚美		
○研究分担者	看護学科教授	市村 久美子	看護学科教授	松田 たみ子
	看護学科教授	山口 忍	看護学科教授	小野 敏子
	看護学科教授	吉良 淳子	看護学科教授	中村 博文
	理学療法学科	水上 昌文	助産学専攻科教授	島田 智織
	看護学科准教授	富田 美加	看護学科准教授	沼口 知恵子
	看護学科助教	前田 隆子	看護学科助教	本村 美和

○研究年度 平成28年度
(研究期間) 平成28年度～平成30年度(3年間)

1. 研究目的

近年の看護系大学数および定員の増加は著しい。本学が開設された1995年度には、看護系大学数は全国で40校、定員は約3000人であったが、2015年度では当時の約60倍の241校となり、定員は約7倍の20814人となっている。これに伴い、看護系大学院数および入学定員も増加している。本学の修士課程が開設された2002年度では看護系大学院修士課程を有する大学は全国で44校だったが、20165年度には約3.6倍の161校となり定員は2,580人となり、大学側としては大学院生の獲得競争が激化している。

本学の博士前期課程看護学専攻では、2008年から20014年度において、2010年度を除き、一次募集において受験生が定員6名を下回る状況が続いている。前期課程志願者の中での本学卒業生をみると、看護学専攻では28%、理学療法学科・作業療法学科専攻では30%前後、放射線技術科学専攻ではほぼ100%となっている。今後、前期課程教育を充実する上でも、安定期な募集人員確保が必須条件ともなり、卒業生が一定の割合を占めることが望ましい。看護学専攻の修了者に占める本学卒業生が占める割合は1.8%であり、必ずしも卒業生のキャリア形成の選択肢に大学院が位置づけられているとは言えない。

本学では ユニフィケーションの実績とさらなる展望が求められている。付属病院においても本学修士課程修了者も少しずつ増えているので、今後学位取得者の活動モデル(キャリアパス)を構築していく必要性も高い。茨城県内における看護系の大学は本学を入れて4校、平成30年度にはもう1校増える可能性があり、これらのうち、修士課程は3校である。このような現状から、地域における本学の独自性を明確にすることは喫緊の課題といえる。

そこで、地域に根ざした将来の看護のリーダーを養成する上でも実践力を拡大する魅力あるカリキュラムを開発することが求められる。

以上の背景を踏まえて、より魅力ある看護学専攻となるように、地域での高度実践力拡大を目指した大学院看護学専攻(修士)のカリキュラム開発を行うことを本研究の目的とする。

2. 研究方法

調査1:

より魅力ある看護学専攻となるように、本大学院看護学専攻(修士)への要望と進学への意識調査を行い、本学がおかれている現状を理解し、今後の魅力ある大学院教育の改革に活かす。

研究協力者として、①茨城県立医療大学卒業生・修了生(学部卒業生・大学院修了生・助産専攻科卒業生・専任教員課程修了生・認定看護師課程修了生)、②看護学実習施設に勤務している看護師 とする。

調査2:

国内外におけるモデルとなる大学および関連施設にて、地域を大学院カリキュラムについて情報収集及び面接調査を行う。研究協力者としては、実践家(CNS他)、管理者、モデルとなる他大学の教員、モデルとなるカリキュラム開発を行っている大学および教員等とする。

3. 研究結果及び考察

調査1:

2016年4月よりアンケート内容を設計、9月に事務手続き開始し、2017年1月に準備完了し、本学卒業生を対象に786通を送付する(内訳;看護学科卒業生767名 ;助山学専攻修士 19名)。現在、宛先不明17通で、2月23日現在の回収数209通、回収率 27%にて、現在、素データ入力中。

調査2:

1)日本国内で、初めてナース・プラクティショナー教育課程を大学院に開設した有識者を招聘し、講演会を開催した。

2)アメリカ、カナダにおける高度実践看護師教育について、カリキュラムやその構造、開講されている授業内容などを含めた現状の情報収集を行い、本学の大学院博士前期課程の方向性を検討する上での基礎資料を得た。

スケジュールは、9月12日－9月14日にてトロント大学看護学部視察、9月14日－9月17日にて、イリノイ州立大学シカゴ校看護学部視察。内容としては、高度実践看護に関連するプログラムに関する各専門別の詳細な内容とともに修士NPとDNPの違いについて情報を得た。また、学内の実習室や教育設備を見学した。特に図書館はEBMの実践のために、文献はすべてWeb化され常に自分のパソコンで検索できるようになっていた。また、スキルラボは、学生たちがEvidence Based Medicineをトレーニングできるようにハード・ソフト面ともに充実していた。

3)面接調査は、現在1名実施し、他の該当者には依頼中である。

臨床現場からの本学の魅力としては、社会人入学ができるという意見をいただいている。

まとめ:

全体としては、計画は遅れ気味ではあったが、時期としては「大学の改革プラン」でも大学院については検討される可能性があるため、引き続きデータ分析および面接調査を進めていく必要がある。その上で、カリキュラム試案を検討する必要がある。

4. 成果の発表

<論文発表>

1)富田美加, 加納尚美, 沼口知恵子, 前田隆子, 本村美和:大学院博士前期課程看護学専攻のカリキュラム改定に向けたビジョン作成ワークショップ, 茨城県立医療大学紀要, 22, 2017;投稿中。

2) 山口忍, 前田隆子, 沼口知恵子, 加納尚美:海外視察で学んだ大学院での高度実践看護学教育ートロント大学・イリノイ州立大学の実際からー, 茨城県立医療大学紀要, 22, 2017;投稿中。

3) 加納尚美, 市村久美子, 松田たみ子, 山口忍, 吉良淳子, 小野敏子, 島田智織, 中村博文, 富田美加, 沼口知恵子, 前田隆子, 本村美和:看護学科卒業生の大学院看護学専攻(博士前期課程)に関する意識調査, 茨城県立医療大学紀要, 22, 2017;投稿中。